

ヤマトタケさまを暴虐な人物像に書き換えたのは『古事記』です。

記述の内容を比較してみると良く解ります。

〔国事系〕 39アヤ

〔日本書紀〕

〔古事記〕

206 天皇詔小碓命、何汝兄、於朝
夕之大御食不參出來。專汝泥疑
教覺。泥疑二字以音。如此詔以後、至
于五日、猶不參出。爾天皇問賜
小碓命、何汝兄、久不參出。若
有未誨乎。

イマシニ
凡ヤ升○升 升ハシヤ
オソル、ノ アマリ
日母公、田 ○ヤ升
マモラシム
ヤモラシム

トミノオ
平元田曰

301 汝不欲矣、豈強遣耶。
何未對賊、以豫懼甚焉。
因此、遂封美濃。
仍如封地。
是身毛津君、守君、一族之始祖
也。

204 (264) 大碓命、守君、大田君、
嶋田君之祖。

206 答曰、朝署入廁之時、待捕搯批
而、引關其枝、襄薦投棄。

206 故、其大碓命、娶兄比賣、生
子、押黑之兄日子王。此者三野之玄孫
不娶妻、賣、三三、三三、三三

12代ヲシロフケさま(景行天皇)は、兄のモチヒト(オホウス)の不甲斐なさに、あきれはててしまわれたのです。東征を強要するおこころはなかったのです。

『古事記』は、独自の文章で、景行天皇が問うように促したので、弟のヤマトタケは、兄のモチヒトにちゃんと親切に教えたと言つのです。暴力的に。

「朝、便所に入った時に、掴みひしいで枝を引っ搔いて」モに包んで投げ捨てた」(簀巻きにした)この記述を鵜呑みにしたら、「ル」付きの、ヤマトタケルだと言つてよいでしょう。『古事記』の誤訳に毒されたお話しです。

もとの『ホツマツタエ』も、『日本書紀』もそんな事は記していません。

39、ホツマうち ツスウタの アヤ

十二代 景行天皇 38・39・40アヤ、三分割の中の前半

^{39・1} ラシロワケ(十二代景行天皇、タリヒコ)さんのミヤコ(皇居)はマキムキのヒシロのミヤ(桜井市巻向)に築かれました。纏向遺跡がまさに此処です。

ラシロワケさんの40年(アスス827年)セミナ(6月)に、ホツマ(関東地方)での騒乱が起きました。納税拒否などの反乱です。いよいよ言うべきところですよ。

サカオリ(富士山南麓、ハラミのミヤ)に在任していたオオトモ・タケヒは、事態の悪化がひどくなってきたので、上申のためミヤコに上って来ました。何とかしてほしいと、ミカリ(平定軍の派遣)を願います。

^{39・2} ラシロワケさんは諸臣を集めて平定のための会議をお開きになっておっしゃいました。

「ホツマ(関東地方)のアミシ(見るに堪えない人達)は掠(かす)め取ってクニを潰そうとしています。」

タレヒト(誰人)を遣(や)りて平(む)けんとなすべきか?」

しかしながら、諸臣は誰一人発言しないのでした。

ミツルナヒ

③ 諸臣は、ふたごの兄弟の出来不出来を慮っていたのでした。弟は26歳でクマソタケル(トリイシカヤ)の叛乱を平定なさいました。それがアスス814年、それから13年。ヤマトタケさんは39歳になられていました。アスス827年になって東国が叛乱です。平穏な世の中をもたらしたいとラシロワケさんは願っておられたのですが、うまくゆきませんでした。「タタミコオモエ」のラシロワケさまのお気持ち、ヤマトタケならうまく収め得るのでは。

ヤマトタケは宣言します。

「先にはトミラ(私ども)はニシ(西、九州)を討ちました。ヒカシ(東、関東地方)を討つのは兄のモチヒト(オホウス)でありますよ」

ミツルナヒ

③ ヒトの付くイミナ(実名・まこと名)はお世継ぎの位です。ですから、モチヒトの意向を問うべしだと。とヤマトタケは発言したのでした。

時に、オホウスはワナナキ(恐れて震えて)まして、朝廷には出てくずにノ(野)に隠れてしまっていました。

^{39・4} そこで、オホウスを呼び召して詰問なさいます。

「イマシ(汝)は兄の立場にありながら、隠れるとはとてもないことです。恐れるのあまりの事態ですから、どうしようもありません。オホウスをホツマ(関東地方)に派遣しても仕方がないことです。」

ミノ(美濃)に居て、その守りに就(つ)いていなさい」

と、おっしゃいますラシロワケさんでした。『古事記』のひどき、1枚目参照。

^{39・4} ヤマトタケは、ここにオタケヒ(声を大きくして)宣言します。

「ニシ(西、九州)を平(む)けて、また、間もなくヒカシ(東、関東地方)にと平定にまいります。譬(たと)え、トミ(自分の事)を勞わりになられるとも、平定に参ります」

^{39・5} 時に、ラシロワケさんは、ホコを持ちてヤマトタケさんに授与をなさるべく、ミコトノリしておっしゃいます。

「吾(われ)聞(き)くアミシ(おこないが見るに堪えなく酷いヒト)は、ムネを凌ぎて(目上

を上ともしない)、アレ(村)オサ(長)も無く、ムラキミ(村の有力者)達は互いに力で
侵しあって奪い合いをして、山も山のように荒らし合っています。カタマシキ(凄惨な状
況)ものです。チマタカミ(放浪の暴力者)の横行です。その中であってエミシたちは、夫
婦の道も無く、血縁の社会秩序も無く、アナ(穴居)に住み、ケシシ(獣肉)をハミ(食べ
て)、ケコロモ(獣皮の衣服)を着て、国家の恵みを忘れてアタ(一般の政を妨害する)を
為します。

すなわち、弓矢の扱いも上手でタクイ(類、輩)を集めて悪事をはたらいて野山を走って
人々を窮地に追い入れます。アメナルミチにマツロハ(従う)無いのです。

^{39・10} 今、わたくしの思いますのに、イマシ(あなた)こそ、スガタ(姿)もキラシク(輝
いて)モモチカラ(百人力)で、平定に行くにあたって何の障害もありません。そして、攻
めれば勝つ事でしょう。

この事から、知るのです。つまり、身は我が子にあっても、真実(まこと)はカミ(祖先
からの偉人)の生まれ変わりであるのだらうと。

吾れは、クラク(秀才ではない)、充分に治め得ない。あなたこそミヨ(天下)を継ぐた
めに生まれて来てくれたのだ。朝廷の断絶を防ぐため。

ナンチ(汝)こそ、アメガシタをシル(治める)クライ(品位)でありましょう。

深くハカリ(熟慮)て、イツ(先人の遺徳)に深く感謝して、人々に恵みを及ぼして信頼
を得てください。建国の精神の「トのヲシテ」を復活させて「ホ・ッ・マ(実り豊かに生じ
させる)」の社会を再構築を成し遂げて、カタマシ(脅しすかせたりする)モノたちの心を
カンツヨ(建国当時の麗しい時代)のように直してください」

^{39・12} ヲシロワケ(景行天皇)さまはミコトノリをして、ツルギをヤマトタケにお授けに
なったのでした。

みホコ(ツルギ)を受けたヤマトタケは答えます。

「昔には、ミタマのフ(生じて来るタマの繋がりの積み重ねの信頼の財産)に拠りまし
て、クマン(トリイシカヤ、クマンタケル)を平(む)け得ました。今もまた、ミタマ(生
じて来るタマ、ご先祖の偉人の繋がりのフ(積み重ねの信頼の財産)をお借りしまして
アタ(反乱を企てるもの)をクニの境に討ち臨んで、マツロワざれば(恭順を示さなかつた
ら)討つべしと存じます」

^{39・13} ツルギを受け取ったヤマトタケさんは、キミを拝みまして出発します。ヤマトタケ
39歳の時のことです。ヤマトタケさんに同行する重臣は、キヒ(キビ、吉備)のタケヒコ
と、オオトモ(後の大伴氏)のタケヒです。また、ナツカハキをカシハテ(食事の係り)
に任命なさいました。

ミツルナビ

③ ナナツカハキ(ナツカハキ)の子孫は、後に高橋氏になってゆきます。『高橋氏文』が残されています。

^{39・14} 40年(アスス827年)カナツキ(10月)2日にカトテ(門出、出発)なさいま
す。東国への道筋を行く前に、寄の道をなさいました。まずはイセに向かわれました。
^{39・14} 7日にイセのカミ(伊勢神宮)にお祈りされまして、イソのミヤ(磯神社、伊勢市磯
町)に引退なさってお暮しのヤマトヒメさん(129歳)にお会いに行かれました。

ミツルナビ

③ ヤマトヒメさまは、もつと長生きなさいました。アスス840年にお元気の記述が40アヤ93ページに記載
があります。142歳です。ちなみにアスス840年の時にヲシロワケさまは133歳でした。

「これでお別れかも知れません。キミの仰せに拠りまして、アタ(朝廷に反逆するもの)

を討ちにまいります」

39・15 ヤマトヒメさんはニシキのフクロに入ったアヤ（文献）と、ツルギを、ヤマトタケにお授けになるのですた。

「アメモミマロ（ニニキネ）のお染めになられた「ヒ・ミツのハラヒ」のおん（御）フミがこれです。ヒヤミツなど自然神からの災いが及んで来たら、このフミのノト（祝詞）でハラヒ除いてください。」

昔、イツモ（出雲）のクニを開いたソサノヲさんのムラクモ・ツルギはこれ、です。謹んで受け取って、アタを討ってください。」

くれぐれも申します。な・おこたりそ」
と、おっしゃいましてニシキのフクロと、ムラクモ・ツルギをヤマトタケにお授けになるのですた。

ミツルナヒ

③ くどいように「なおこたりそ」とおっしゃっていたのは、妻のヲトタチハナヒメが間に挟まってつらいことへのお気使いです。

39・17 ホツマ・ウチに至りました事情につきまして振り返ってみます。

先代の11代イクメのキミ（垂仁天皇）の命に因（よ）りまして、タシマモリがカクのハナ（建国のシンボル、精神）を求めに行きました。49年前の、アスス778年の事でした。（37・48）

10年の歳月をかけて任務を果たして戻ったタシマモリのノコシフミ（遺文）に、次のようにありました。

「当初は、クニ、ソマサレハ（クニ言葉（方言）や風習に馴染みがない）でしたので、話も十分に出来ないありさまでした。目的のカクの樹を得ようと強く思いました。そこで、タチハナ（カク）のモトヒコのヤ（家、館）にて数年逗留しました。言葉を習い風習を習いました。その後、ヒタカミのキミと、シマツのキミに相知りまみえまして、漸くの事にカク（タチハナ）を得ることが出来ました。ところが、カクをお見せする前にイクメのキミ（垂仁天皇）は、既に、カミ（崩御）となられてしまいました。」

39・19 報告が出来なかったのを、チチ（千々に）悔やみまして、ワカミヤ（のちの景行天皇）にカクを奉りますもので御座います。

ワカミヤのキミに申し上げます。

ヤツカレ（私）が、タチハナ（カク）のモトヒコと結びましたユカリのミナモトを、どうぞ思召されまして、ホツマ（ニニキネさんの気高い統治）をシロシ（恵み治め）召されてください」

39・20 タシマモリのノコシフミ（遺文）を見られたヲシロワケさんは、タケウチに相談をなさりつつ進められました。タケウチをホツマ（関東地方）に下らせて、カクのモトヒコの様子を探らせます。

39・21 （ハナタチハナヒメ？ もうお亡くなりだったのかも）ヲトタチハナヒメと、重臣のホツミ・テシと、サクラネ・マシもホツマクニ（関東地方）に戻しました。ハナタチハナヒメは先の夫だったタシマモリのお葬式に来て、ミヤコ（奈良）でヲトタチハナヒメをお産みになりました。ハナタチハナヒメは、オシヤマと再婚します。娘のヲトタチハナヒメは、ヤマトタケさんに嫁いでいましたのですた。

39・22 いよいよ、ヤマトタケの平定軍が遣わされます。すると、ヒタカミからは反抗する

同盟の誘いがカク・モトヒコに来たりました。モトヒコは同調はさすがにしませんでした。しかしながら、モトヒコたちはシロ（城）を固めます。特に、ホツミ・テシとサクラネ・マシが要塞の堅牢化に中心になったようでした。

こういう情勢のところにヤマトタケは進軍するわけです。ヤマトヒメさんが心配なさったのも当然の事でした。

39・23 それは、エミシ（見るに堪えない人々）のヤカラ（輩）の如くでした。そして、表面上はヤマトタケを迎えに来たとは言うものの、騙し討ちを狙っていたのです。あわよくば討ち取ってしまおうと攻め寄せて来ました。

富士山の裾野で、ヤマトタケと遭遇します。ホツミ・テシとサクラネ・マシらは、計略を巡らしてヤマトタケに鹿狩りを勧めました。

「野のシカが 息きりたちて

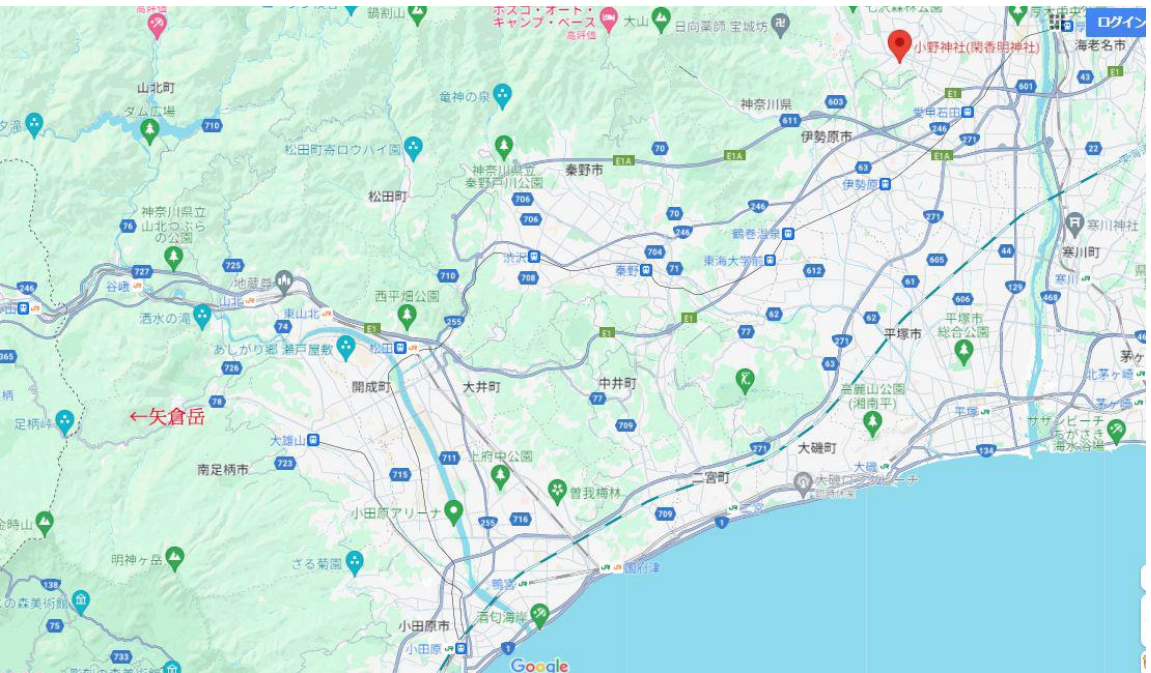
ふみしたく しもとゆひして

みちを知る のそみ（臨） めくり（巡）て

狩りたまえ」

ヤマトタケにとっては知らない人からの勧めではありません。ホツミ・テシもサクラネ・マシも周辺の人々とも、ミヤコ（ヒシロのミヤ）で親密な交際をしていたのでした。

39・24 ヤマトタケさんは勧められるまま野の中に入って行かれました。すると、アタ（仇）は野に火を放って焼き殺そうとするのでした。



ここに、ヤマトタケさんは欺かれた事を知り、切りの向かい火を放ち、「ヒ・ミツのハラヒ」を三度ノリ（奏上）しました。そうしますと、風向きがコチ（南東風）から変わってニシになりました。ケムリ（煙）も逆に向かいます。アタ（仇）の方にケムリが向かいましたので、さらに、草を切り払い、燃え草を飛ばします。アタ（仇）のイクサ（戦闘軍団）は焼き滅んだのでした。ヤケツノ（焼津）と言う地名の元になりました。ツルギの名もクサナギテ（クサナギツルギ）と呼ばれます。

39・26 ヤマトタケさんは、クニ境のアシカラヤマ（足柄山）に攻め至ります。さて、次は、サカム（相模）の中心のオノ（厚木市小野、小野神社）の攻防になります。オノではシロ（城壁）のように守りを固めているのでした。最早、疑う余地もなくアタ（仇）ヤカラ（輩）として対処しなくてはなりません。

ヤマトタケさんは火攻めをする事になさいました。オノの要塞の周りに薪を積み上げて70日間の火照りの火攻めです。乾き燃えて大きな炎になりました。

39・28 ヤクラのタケ（矢倉岳）に登り見られたヤマトタケさんは、イクサ（軍）を三手に別けて進めることになりました。キヒ・タケヒコを才

イソ（大磯）方面へと進ませます。オオトモ・タケヒはオオヤマ（大山）の方面のキタ（北）からオノのシロに向かわせます。ヤマトタケさんは真っ直ぐにオノに向かいました。

オノでは、火攻めによって要塞が崩れ落ちようとする一歩手前になっていました。アタ（仇）の抵抗も無くなるようでした。ヤマトタケさんは鎮火を図ります。

39-29 カミススキヨメ【詳細は未詳】シラカシのタチ【詳細は未詳】をハラミ（富士山）のミハシラ（祭りの依り代）として、「ヒ・ミツ」の「キ（来ること）」を「ヨ（良くする）」のハラビのノト（祝詞）を奏上して鎮火を祈念します。すると、タツタのカミが感応して、ハラミ（富士山）の山頂のコノシロイケに住むタツがアメ（雨）を降らせて火を消すのでした。ミヤ・イクサ（平定軍）はどよめきを上げて、抵抗するアタを半ば討ちました。最早、アタは逃げ去り散り散ります。トキ（関の声）を上げて勝利を鳴り響かせました。

39-31 オノの要塞に迎え入れられます時の事です。ヲトタチハナヒメはヤマトタケの手を取って涙して言います。安堵の表情です。

「ヤツカレ（私）はじめオノオノ（皆々）が正に焼けんとする所を、あなた様がお祈り下さいました。火災を鎮火をしてもらったお蔭で、今、幸いにお顔を拝むことが出来ました」喜びの涙は袖を浸すものでした。

39-33 1-1-1、カク・モトヒコはヨモ（四方）に触れを出して、ヤマトタケさんにまつろった事を表明します。また、朝廷に反抗するような事があれば、モトヒコとしても成敗すると触れました。結局のところ、オオノタカラ（一般国民）がミカリ（ヤマトタケさんの巡幸平定）を乞い求めているのです。阻むのは間違いであると、モトヒコも覚りました。

39-34 モトヒコはカクのカコ（日本固有種のタチハナの旗立てモノ）を用意してヤマトタケさんに提供します。

39-34 シハス（12月）8日の事です。ヤマトタケはオオイソ（大磯）からカツサ（上総）にイクサ・フネ（軍隊を載せた船）での渡航をします。ところが、風雨が激しくて船は翻弄されます。ヲトタチハナヒメは、波を鎮めようと決心なさいました。船の舳先に登ったヒメは、アメ・ツチに祈ります。

39-35 「ワガキミ（ヤマトタケ）の目指すところ（志し）は、イツ（こころ）の集中、どうやってさらに良くしてゆくか？」を、ヤマトに立てんとなさる事です。

国家建国の原理の「トのラシテ」の精神に立ち戻って今の現状に最適合の構成を極めて直して定めゆくことです。ヤマトはフタカミの時代にもあった国号です。

わたくしは、キミ（ヤマトタケさん）の大きなお志のために、一抹でもの力添えをしたいと思います。

タツとなって、船を守ります」

ヲトタチハナヒメは、海に入られるのでした。

周りの人が驚いて止めようと思いますが、あつという間の出来事です。ヒメが海に入るのを止めるべきありませんでした。海に入ったヲトタチハナヒメを探し求めましたが、遂に、見つかりませんでした。

39-36 海は凧（な）ぎてきまして、船は無事に着岸できました。カツサ（上総）にて、サカキの枝にカガミを掛けて待っていた人が居ました。カトリ・トキヒコとカシマ・ヒデヒコとイクス・オトヒコ、それとオオカシマ（『ミカサフミ』の最終編集者247歳で上梓。この時231歳）がミアエ（ご馳走）を用意していました。

アシウラ【霞ヶ浦か、廻沼か？ 未詳】を越えて、ナコソの浜の仮ミヤにヤマトタケさんは滞在なさいます。ヲシロワケさんの42年（アスス828年）のことでした。

39・38 ヒタカミの最有力者のミチノクと、シマツ・ミチヒコ、そしてクニツコの5人と、アガタヌシの174人は、集まって防衛陣をタケのミナト（岩沼市か？）に構えました。時に、ヤマトタケさんは、ナコソのカリミヤにお留まりになりました。オオトモ・タケヒを使わされます。説得の為です。

39・40 シマツのカミ（ミチヒコ）は、予（あらかじめ）めいサワ（アマテルカミからの威光）に畏れてまつろつ事を決めました。オオトモ・タケヒがタケのミナトに到着すると、シマツ・ミチヒコは弓矢を捨てて平伏します。

39・41 タケヒは更に進みまして、ミチノクにサヲシカ（勅使）を遣わします。ヒタカミのカト（多賀城付近か？）平泉付近か？）に、ミチノクは迎えに出て来ました。そして、ミチノクは言います。

「今、あなたの仕えるヒトのスヘラギのキミは、衰えていますね。今になって、やって来てクニを奪おうとするのですか」
オオトモ・タケヒは答えます。

39・42 「カミ（アマテルカミなど代々のアマカミ）のミコが、あなたを召していますのに、まつろわないのであれば討たざるを得ないのです」
ミチノクが言います。

39・43 「それは理不尽です。我がクニはオオミヲヤ（始祖）のタカミムスビがこのクニを開きました。そして、7代にわたって代々受け継いだのです。ヒノカミ（アマテルカミ）はここにてアメのミチを学ばれました。（アマツのミヤ、涌谷町の黄金山神社）それで、ヒタカミと尊んで呼ばれます。アメのミコ（オシホミミ）は、ヒタカミのチチヒメとの間に二人のミコ（皇子）を儲けられました。兄は、アスカミヤ（ホノアカリ）でした。弟は、ハラミ（ニキネ）です。この時代に、クニを正式に賜りまして14代になりますわたくしの今に至るまで、他の統治を受ける事無くやっていました。

あなたのキミの方は、アスカミヤの流れ（ニギハヤヒ）を暴力で討ちクニを奪い取ったのでしたね。それは、カミ（アマテルカミからの伝統）に違（たが）える為し様と言つべきです。その為、我々は不信感を持っています。

今また来たり、クニを取らんとするのですか！ これでもカミの称号が名乗れると言うのですか？ スヘキミ（スヘラギのキミ）よー！」

39・47 タケヒは、微笑んで答えます。

「これ、なんち（あなた）に答えましょう。

あなたは、田舎に住んでいたから詳しい事情を知らなかったのでしょうか。あなたの言い分は筋が通っているようにもみえます。しかし、正鵠を得ているとは言い得ません。詳しく説明しますので、しっかり聞いてください。